



## 江戸時代にはごみはどうしていたの

### 江戸には、ごみ捨て場がもうけられていた

江戸に幕府が開かれ、多くの人々が住むようになると、ごみ処分の問題が出てきました。最初のうちは、江戸の住民は、自分の家の近くのほりや川、あるいは空き地にごみを捨てていました。しかし、ほりや川にごみを捨てると、船の通行にじゃまになるし、空き地は火事が起こった場合を考えて、あけておくように決められました。

1655年、幕府はごみを永代島に捨てるように決めました。江戸の住民は、ごみを家の近くに捨てることを禁じられたうえ、永代島まで運ばなければならなくなりました。このとき、ごみ捨てを仕事にする人（芥取請負人）が現れ、ごみを集め、それを運ばん船がとまっている川岸まで運び、さらに船のせて、永代島まで運んで処分してくれるようになりました。江戸の住民のごみは、共同のごみのために捨てるだけでよく、あとは、請負人が処分してくれました。そのかわり、町の住民は、ごみ捨て賃を払いました。

### うんちやおしっこはお金になった

江戸の住民の出すうんちやおしっこ（糞尿）は、江戸の周辺の農民にとって、重要な肥料として広く使われました。江戸周辺の農村では、米や野菜を作るための肥料として、糞尿はなくてはならない重要なものだったのです。農民はお金を払って、糞尿を手に入れたのです。このように江戸では、糞尿はごみとして捨てるのではなく、重要な資源とみなされ、利用されたのです。（監修・田代 脩）

